



(1)

(2)

(3)

(1)

(1)は左側面上部を折損する。下端は台形にカットし、表・裏面と側面は丁寧な削り調整を施す。裏面中央には焼印を押す。(2)は上端の一部を欠損。樹種はスギである。(3)はほぼ完存。全体に削り調整を施し、樹種はヒノキである。

これらの木簡は、人名、地名、商品名や数量が記載されていることから、荷札として使用されたと考えられる。(1)の「通」は現在の長門市通であり、江戸時代日本海における捕鯨基地として繁栄したところである。「鯨油」は灯明の燃料などとして搬入されたものであろう。(2)の「地福村」は阿東町地福。(3)の「畔頭」は防長地域内における組頭のことと、庄屋のもと地域の行政を担当した。「宇田」は阿武町宇田。これらの荷札に記載されている地名から、防長各地より萩城下町にさまざまな物資が搬入されたことが窺える。

9 関係文献

(財)山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター「萩城跡(外堀地区)」(『陶墳』一二一九九九年)
(谷口哲二)